「場が『学び』を変える」

- 教職協働で学生の成長を支援するために生まれたワークプレイス -

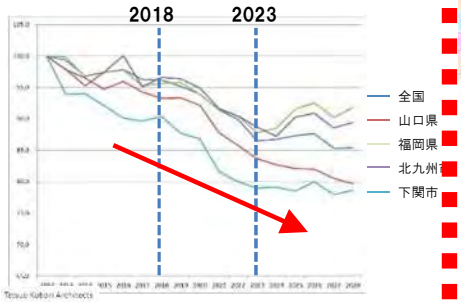
FM実践者:学校法人梅光学院　梅光学院大学

概 要

梅光学院大学は山口県下関市にある私立大学。1872年ヘンリー・スタウト博士夫婦による私塾に起源があり、150年に近い歴史のあるミッションスクールである。1967年には大学を設置。近年の18歳人口の減少と地元の若年層の都市部への流出のあおりをうけ、学生数が減少し教学的にも財政的にも苦境に立たされていた。

2012年度に学校改革に着手し、執行部に外部人材を加え、組織の根本からの立て直しを図った。また「入学直後からの専門たこつぼ化」を脱すべく、共通の教養基礎、共通専門、専攻ごとの専門 というカリキュラム編成に変更した。大学の新たなビジョンとして、国際的（グローバル）な視点を持ちながら地域社会（ローカル）に貢献する「グローカル人材」の育成を掲げた。

山口県、福岡県の18歳人口推移



梅光学院大学入学者推移

年度	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020
志願者	330	324	298	330	331	287	264	413	422	479	548	553	620	608	889
入学者	199	216	203	205	224	181	183	257	253	269	343	330	346	354	379
定員充足率	71.1%	77.1%	72.5%	75.9%	83.0%	67.0%	67.8%	95.2%	93.7%	99.6%	127.0%	113.6%	119.3%	114.2%	112.3%

改革前には下関市の人口減少や周辺地域の18歳の人口減少に伴い志願者、入学者の減少に歯止めがかからなかった。大学が生き残るためには学校改革を必ず成功させる必要があった。

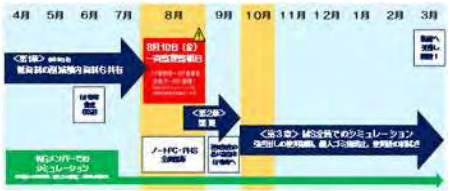
プロセス

働き方改革ワーキンググループ

2018.01　発足

教員・職員が協働して、学生を支援できる新しい完全フリーアドレス制オフィスに円滑に移転するための準備・活動を行うワーキンググループの発足

【2019. 03の移転までのスケジュール計画】



2018.08　一斉整理整頓（プレ・ペーパーフリー）

現状の執務スペースでプレフリーアドレスの実践

2018.12　事務職員働き方ワークショップ

2019.04　新校舎オープン　運営開始

新校舎建設プロジェクト

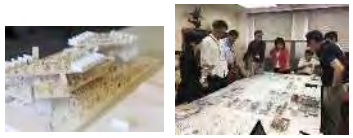
2016

2016.12　新校舎建設決定

2017

2017.03　建築設計コンペ実施

2017.06　建築設計スタート



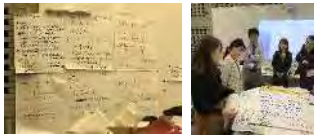
模型を使ったキャンパス全体の見える化

教職員・学生も参加した3回に渡るワークショップ

2018

2018.03　工事着工

2018.08　シラバスを読む会



新しい学びの場とシラバスの連携を考える

2018.08　家具ワークショップ

実際の家具を使って授業や働き方のイメージを身体的スケールで体験

2019

2019.03　家具納品・工事

2019.04

新校舎オープン

オープン

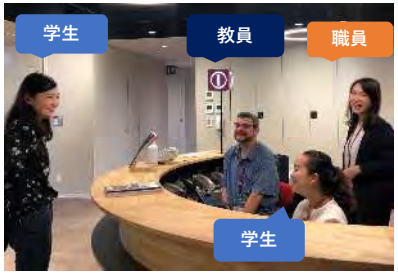
01・教職協働を実現するフリーアドレス制オフィス

「教職協働」で学生の成長を支援するため、教員個別の研究室を統合し、教職員すべてを１Fに集約。フリーアドレス制オフィスとなっている執務スペースは、教職員の円滑な連携の強化に加え、教員・職員と学生との交流の活性化が進む。

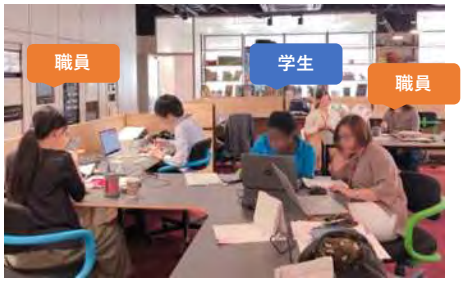
教員アンケートでの高い評価項目
・連絡/連携が密になった
・学生と会話をする空間が多様
・学生の指導がしやすい
・打合せが容易になった
・仕事の効率が上がった

教員・職員が一緒に働くフリーアドレスの空間に学生も入り込み、偶発的なコミュニケーションが生まれる。１Fに点在している教員に割り与えられた見せる本棚は研究内容や人となりがわかり、会話や交流のきっかけにもなる。季節に合わせてディスプレイをアレンジする教員もおり、知の可視化が実践されている。

週一回の朝会の様子。フリーアドレスの空間を有効に活用して、全体会議が行われている。



ワンストップサービス窓口では、日ごろから教員、職員、学生が一体となって運営。



フリーアドレスの空間に学生が入り込んで職員に手続きなどの相談するシーン。

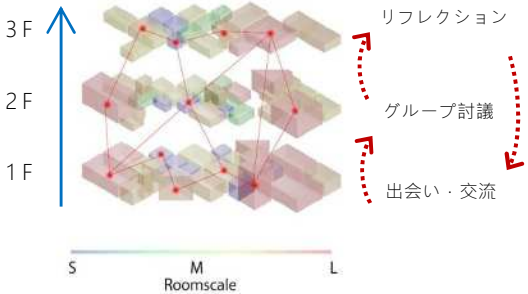
学生が教員を見つけて立ち止まって話す様子も日常の一コマとなっている。

02・居場所を選択できる空間と移動できる家具

廊下と教室という概念をなくすことで、すべての空間が学びの場となる。異なる対人距離を空間モジュールとした、大小さまざまな間仕切りのないセミオープンな空間が連なるアクティブ・ラーニング空間。365種類の椅子は多種多様な学生の個性のように毎日違う体験を楽しめる価値となる。

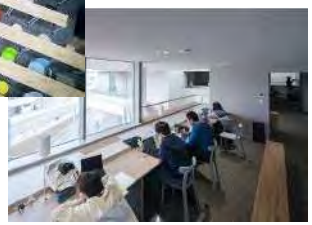
教員アンケートでの高い評価項目
・活発な議論や質問が増加した
・グループワークが増えた
・集中力の向上
・学生の表情が変わった
・居場所をみつけ学習する姿を見かける

【空間と活動のリンク】



対人距離をスペースで区分したエドワード・T・ホール『かくれた次元』を参照

多種多様な椅子



点在するパーソナルな集中スペース

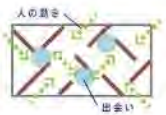
階段教室でPBL型授業（パートナー企業の方が講義）

授業内容に対応して柔軟に変化する空間

活動が見え隠れする立体空間。可動式の机と多種多様な椅子で活動の自由度を増す。

03 ・ ICTの導入で学校運営の体制を次世代型にシフト

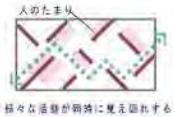
1．ぶつかりを生む
壁上に開かれた多方面からのアクセスは、今までになかった新しい人の動きと交流をつくり出す。



2．活動を促す壁
教育 ICT のツールである短焦点プロジェクターが設置されたマグネット兼ホワイトボード壁を配置。空調機も仕込まれている。

3．拠り所をつくる
アクティブウォール周辺や囲われた空間が、学生の拠り所となり、あらゆる所に学生の居場所が生まれる。

4．活動が見え隠れする
活動を風景にしながら、空間を縫うように進むことで出会いや発見、刺激をもたらし学生の主体的学びを誘発する。



学生と教職員にノートPCを必携させるなどICTを推進することで、教材や資料、学生のプレゼンテーションなどあらゆる情報共有が効率的に行われている。本学が掲げているグローバル人材の育成には、無線ネットワークの環境下で場所を選ばず能動的に動くことは必須である。ICT化の推進と新校舎のコンセプトの一つである「オープン、セミオープン空間のつながり」が実現したことで、自分の居場所を適切に選択するという能力を養い、未来へと順応するための学びの場を提供している。

3～4年生の授業における「課題解決型」ゼミ（PBL / Project-based Learning）
学生達は通常の授業では接する機会の少ない企業・団体の方々と意見を交わし、自らその解決策を考えてきた。新校舎の3F全てを使った発表会は、同時にあらゆるところでプレゼンが行われた。

04 ・ 街に開き、都市のハブとなる大学

新校舎がもつ場所や空間は物理的だけでなく、その精神性も含めて学内だけに留めることなく、地域社会に波及させていくことが、ある種の公共性をもつ大学の本来の役割であるという考えから、街に開いたパブリック中心の大学となるよう運用を目指す。

【レクチャーからパブリック中心の大学へ】

キャンパスの周辺は体育館や学校、住宅が密集した市街地である。今回の新校舎を機にキャンパスと街との境界をなくし、オープンな大学とする計画とした。

大学生協が運営する1階カフェレストランを地域住民に開放し、日常使いはもちろん学生主催でクリスマスイベントなども行っている。

他の大学運営関係者向けに、新校舎建設に伴って大学の変革、働き方改革等がどのように行われてきているかを主催者という立場でイベント・セミナーを開催することで、本来の開かれた大学としての機能を果たし、また今後は外部企業との連携等を今まで以上に積極的に計画している。

地元高校生へ自習スペースとして開放し、図書館のような公共的な場としての運用を行っている。